

双子殺しとミツシヨナリーの時代

小馬 徹

王族の不幸な双子

アフリカの諸文化では、しばしば王と双子の間に親和的な連想関係が見られる。ウガンダのガンダ人と、ガーナのアシャンティ人がその典型的な例である事を前回紹介した。

更に、カメルーン中西部に住むバントゥ語系のバムン人の間では、奴隷の間に生まれた双子は王の養子になったという〔古野清人「双子の民俗学」、『古野清人著作集』4、1972〕。

ところが、アシャンティの王族と平民とでは、双子の象徴的な価値に関して、次のような逆転関係が見られた。平民に生まれた同性の双子は王に差し出された。それが男児なら、召使として宮廷の象の尻尾振り役にされた。女兒なら王の妃候補となり、二人は何時も同じ服装をし、同じ贈り物を受け取った。ところが、王族の双子は「黄金の床几に値しない」、つまり王位に就くべからずとして殺されたのだ〔Parrinder, G., *West African Religion*, 1949〕。

アシャンティの王族のこの慣行は、それだけを孤立させては読み解けない。世界各地の、あるいは少なくともアフリカ各地の、双子殺しを初めとする双子への否定的な慣行全般を視野に入れて比較し、考察する必要がある。

西アフリカと双子

さて、大英帝国の女性を描いた最近のある書物は、植民地でレディーたらんとした一人の逞しい女性宣教師メアリ・スレッサーが、ニジェール・デルタのエボエ人（Ibibio人、それともEbe人またはEbalue人？）の双子忌避慣行と格闘する場面をかなり詳しく描いている〔井野瀬久美恵『女たちの大英帝国』、1998〕。

それによると、エボエ人のある若い女性が男

女の双子を産んだ。すると、彼女の身の回りの品物や衣服は破壊され、彼女は不浄の者としてジャングル奥地に追放される。双子たちは村外れに放置され、その男児は頭を滅多打ちにされて息絶えた。そして村人は、この母親が通った道を穢れたものとみなして放棄したのである。

興味深いのは、スレッサーと親交を結んでいたもう一人のメアリ、つまり「探検家」であり「科学的な観察者」を自認したメアリ・キングズリが、スレッサーの通訳を介して、この母親の次のような言葉を記録に残していることである。

昨日まで私は女性だったけど、今日からは憎悪的だわ。昨日まで食事をともにした人たちが、今日は私にむかってつばを吐きかける。〔中略〕でも、私は彼らを憎まない。ただ、私に双子を産ませた力、人間を超えた力が憎いだけ。〔双子を産んだのは〕私のせいじゃないのに……〔前掲書〕。

人類学者の役割

キングズリは、この言葉に触発されて、こうした慣行が西アフリカに広まった理由を考え始め、「この風習の根底にあるアフリカ人の考え方が理解できなければ、風習そのものを根絶することなどできるはずもない」と主張したという。そして作者は、「それは、まぎれもなく、民族学者や人類学者が異文化に注ぐまなざしであろう」と述べている〔前掲書〕。

一方、スレッサーは、全く別の仕方でも双子を忌避する慣行の克服を図ろうとした。つまり、ジャングルから双子の母親を連れ戻して保護を与えると共に、生き残った双子の女兒を引き取り、養子として育てたのである〔前掲書〕。

本稿はアフリカの人々の名付けについての試論だが、双子の象徴性に既にかなり踏み込んでしまった。そこで、多少本論を逸れるのだが、この点に関してもう少し展望を拡大しておくべきだろう。それは、メアリ・キングズリに代わって、双子を忌避する慣行をアフリカ文化の内側から理解しようと試みることに繋がる。私はキングズリの西アフリカ探検の一世紀後に生きている現代の人類学徒であり、この点に関して、幸い多少とも有利な地点に立っている。

双子の殺害

上の事件の記述は、多少ともその当時の英国人の物の見方に起因する独特の潤色を免れないだろう。だが、大筋では納得できるものだ。本稿は、これまで双子に高い肯定的な象徴性を見出す例ばかりを取り上げてきた。その一方で、二人のメアリの見たものと類似する慣行が、アフリカ各地から報告されているのである。

実際、南ナイジェリアのイビビオ人は、最初は双子ばかりではなく双子を産んだ母親も一緒に殺害したが、その後母親が藪の中に住むことを許すようになった、という報告が存在している [Forde, D. and G. I. Jones, *The Ibo and Ibibio-Speaking Peoples of South-Eastern Nigeria*, 1950]。

また、冒頭に挙げたアジャンティ人の近くに住んでいるヨルバ人は、双子を不吉と考えて水瓶の中に投げ捨てていたと言われる [Parrinder, *ibid.*]。

更に、東北ザンビアに住むバントゥ語系のベンバ人は、双子が生まれると全村が穢れたと見なし、家の炉の火を消して、その灰を西側の溝に投げ込んだ。そして双子の両親は、村を穢れから救い出すべく、浄化儀礼を執行する義務を負った [Labrecque, R. P., "La tribu des Babemba", *Anthropos* 31, 1936]。

南アフリカ共和国のトランスバヴァールに住むロヴェドゥ人は、双子の影に強い力があって、

その影響で病人が死ぬこともあると考え、双子を殺害していた [Krige, J. D., *The Realm of a Rain-Queen*, 1947]。また、同地のソト人やその周辺のジャンガナ、ツワナ、ヴェンダ、トンガなどの人々は、土地が「熱い」状態になった結果遠ざかった雨を呼び戻すために、双子か、逆子や歯が生えて生まれたなど、「異常出産」された子供を殺して湿った川床の土に埋め、彼らの土地を「冷たい」状態に戻したと言われる [Schapera, I, (ed.), *The Bantu Speaking Tribes of South Africa*, 1937.]。

キリスト教宣教団の影響

ケニアのバントゥ語系のキクユ人の間では、かつては双子は二人とも窒息させ、出産に立ち会った老女が藪の中に投げ捨てた [古野清人、前掲書]。だが、その後は初産が双子だった場合に限り、双子の両方、あるいはその次生児だけを殺すようになったようだ [Middleton, J., *The Kikuyu and Kamba of Kenya*, 1953]。

北ケニアの東ナイル語系の牧畜民サンプル人も、植民地政府の禁令にも関わらず、不具の子供と同様に、双子を生後間もなく殺すことを普通に行っていた。ところが、その後キリスト教徒の家族に養子に出すことが多くなったという [Thurnwald, R., *Black and White in East Africa*, 1935]。西南ケニアに住む南ナイル語系のキプシギス人は、同様に、三つ子の第三子を白人入植者に託すようになった。

こうして、アフリカ各地の双子を忌避する慣行とその変化を概観してみると、メアリ・スレッサーは、まさに19世紀半ば以来のミッションナリーの時代の精神を体現した英国の申し子のような女性だったと言えるだろう。

一方、もう一人のメアリ（キングズリ）が自らに課した懸案、つまり双子忌避慣行をアフリカ文化の内側から解明し、理解する試みは、次回に譲らなければならない。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）